多体系の量子力学的記述

目次

- 1. 量子力学的多粒子系の種類
- 2. 2粒子系の量子力学
- 3. 異種の粒子から構成される有限多粒子系
- 4. 同種粒子の不可識別性
- 5. スピン自由度をもつ同種の多粒子系の波動関数の (位置、スピン)交換に対する対称性
- 6. フェルミ粒子に対するパウリの排他原理
- 6.1 電子の量子状態の占有の仕方
- 6.2 スレーター行列式
- 6.3 どのような場合に、反対称化が重要になるか?
- 7. ボーズ粒子の量子状態の占有の仕方
- 8. 複合粒子の量子統計性
- 9. 金属中の電子集団とバンド理論

Made by R. Okamoto (Kyushu Inst. of Tech.)
Filename=Many-particle-quantum-summary090611c

1. 量子力学的多粒子系の種類

- (A)有限個の粒子から構成される多粒子系
 - (A1)<mark>異種の粒子から構成される有限多粒子系</mark> (A1-1)孤立した異種多粒子系

水素原子、電子陽電子対 異種2原子系(COなど) 重陽子

(A1-2)外場の中の異種多粒子系 外部磁場(または電場)の中の水素原子

(A2)同種の粒子から構成される有限多粒子系

(A2-1)孤立した同種多粒子系 核子の多体系としての原子核(核子=陽子、中性子の総称) 金属原子クラスター

(A2-2)外場の中の同種多粒子系

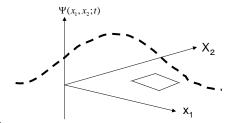
He原子中の2電子系 人工原子中の有限多電子系(量子ドット)

半導体界面における有限電子系

(B) 無限個の粒子から構成される多粒子系 金属中の電子集団

2. 2粒子系の量子力学

簡単のために、1次元(x軸上)の2粒子の運動を考える。3次元に拡張することは容易。 2.1 2粒子系の波動関数とその確率解釈



 $|\Psi(x_1,x_2;t)|^2 \Delta x_1 \Delta x_2$

領域($x_1 \sim x_1 + \Delta x_1$), ($x_2 \sim x_2 + \Delta x_2$)に2粒子が存在する確率に比例

$$\int_{-\infty}^{+\infty}\int_{-\infty}^{+\infty} |\Psi(x_1,x_2;t)|^2 dx_1 dx_2 = 1$$
 波動関数の規格化

2. 2 孤立した(外場なし)の相互作用しない2粒子系

2粒子系のハミルトニアン
$$\widehat{H}_0 \equiv -\frac{\hbar^2}{2m_1}\frac{\partial^2}{\partial x_1^2} - \frac{\hbar^2}{2m_2}\frac{\partial^2}{\partial x_2^2}$$

重心座標と全質量
$$X\equiv\frac{m_1x_1+m_2x_2}{M}\,,\,M\equiv m_1+m_2$$

相対座標と換算質量 $x \equiv x_1 - x_2, \, \mu \equiv \frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2}, \left(\frac{1}{\mu} \equiv \frac{1}{m_1} + \frac{1}{m_2}\right)$

$$\rightarrow x_1 = X + \frac{m_2}{M} x, x_2 = X - \frac{m_1}{M} x$$

2粒子系の運動量演算子 $\hat{p}_{1x} \equiv \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial x_1}, \hat{p}_{2x} \equiv \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial x_2}$

$$\rightarrow \hat{p}_{1x} + \hat{p}_{2x} = \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial X} \equiv \hat{P}_X$$

ハミルトニアンの重心相対運動分離

$$\widehat{H}_0 = -\frac{\hbar^2}{2\mu} \frac{\partial^2}{\partial x^2} - \frac{\hbar^2}{2M} \frac{\partial^2}{\partial X^2}$$

2. 3 孤立した(外場なし)の相互作用する2粒子系

$$\begin{split} \widehat{H} &= -\frac{\hbar^2}{2m_1} \frac{\partial^2}{\partial x_1^2} - \frac{\hbar^2}{2m_2} \frac{\partial^2}{\partial x_2^2} + V(|x_1 - x_2|) \\ &- \frac{\hbar^2}{2\mu} \varphi^{"}(x) + V(|x|) \varphi(x) = E_{\rm rel} \varphi(x), -\frac{\hbar^2}{2M} \Phi^{"}(x) = E_{\rm CM} \Phi^{"}(x) \\ &E_{\rm rel} + E_{\rm CM} = E \\ &\to \varphi(x) \colon \text{相対運動ポテンシャル内の閉じ込め問題の解,} \\ &\Phi(X) = \exp(iKX), K \equiv \sqrt{2ME_{\rm CM}/\hbar^2} \quad \text{ 重心運動の平面波} \end{split}$$

異種2粒子系としての水素原子

陽子を静止させた近似計算の結果(電子のエネルギー)

$$E_n=-rac{R_{\infty}ch}{n^2}$$
, $R_{\infty}\equiv\left(rac{1}{4\piarepsilon_0}
ight)^2rac{m_ee^4}{4\pi c\hbar^2}$ (陽子質量を無限大にした場合の) リュドベリ定数 $=1.09737318 imes10^7\mathrm{m}^{-1}$

陽子と電子の相対運動を考慮した計算の結果(電子のエネルギー)

$$\frac{1}{\mu} = \frac{1}{m_p} + \frac{1}{m_e}$$

$$\rightarrow \mu = \frac{m_p m_e}{m_p + m_e} = \frac{m_e}{1 + \frac{m_e}{m_p}} \approx \frac{m_e}{1 + \frac{1}{1840}} = m_e (1 - 0.0005434)$$

$$E_n = -\frac{R_{\rm eff} ch}{n^2}, R_{\rm eff} = \left(\frac{1}{4\pi\varepsilon_0}\right)^2 \frac{\mu e^4}{4\pi c \hbar^2}$$
3桁から5桁まで
2桁だけより精確になった!!
$$= 1.096775965 \times 10^7 {\rm m}^{-1}$$

孤立系の場合

孤立した2粒子系は重心運動と相対運動は厳密に分離される

例:水素原子の重心運動は自由粒子的(古典的)であるが、 電子と陽子の間の相対運動は量子力学的である!!

孤立した3粒子以上の多粒子系:

重心運動をいかに厳密に、または効率的に分離するかがポイント!! 重心運動の混入による架空の効果が内部運動に影響する!!

厳密に分離するにはヤコビ座標(Jacobi coordinates)の導入が不可欠。

多粒子系の重心運動は自由粒子の運動(=古典的運動!)

多粒子系においては内部運動こそが量子力学的運動

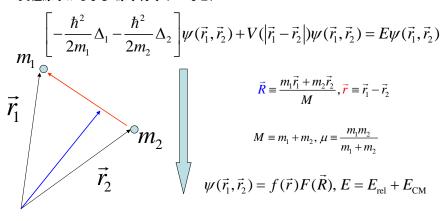
気体の古典統計力学では、水素原子の重心運動だけを考え、 相対運動(電子の励起)を無視した。

熱的揺らぎは k_BT 程度で、常温では約0.025 eV程度。電子の励起エネルギーは数eV程度であるから、常温では内部運動(電子の励起)の効果は無視できる。

3. 異種の粒子から構成される有限多粒子系

(1)孤立した異種多粒子系

異種原子からなる2原子分子(COなど)



ボルン・オッペンハイマー近似

(Born-Oppenheimer approximation)

分子の運動を考える際、原子核の質量は電子の質量の数千倍であるから、 (関系の無量) - 1010 (原系の無量)

(陽子の質量)=1840x(電子の質量)

原子核の運動は比較的ゆっくりで、電子が原子核に相対的に運動している間は「静止」していると 扱ってもよいとみなす。

$$\begin{split} \hat{H} &= \hat{H}_{\text{electron}} + \hat{H}_{\text{electron-nucleus}} + \hat{H}_{\text{nucleus}} \\ &\approx \hat{H}_{\text{electron}} + \hat{H}_{\text{electron-nucleus}} \end{split}$$

重心運動

$$-\frac{\hbar^2}{2M}\Delta_R F(\vec{R}) = E_{\rm CM} F(\vec{R})$$
$$\to F(\vec{R}) = C \exp(-i\vec{P} \cdot \vec{R}/\hbar)$$

平面波 自由粒子的運動

古典的運動

相対運動 $-\frac{\hbar^2}{2\mu}\Delta_r f(\vec{r}) + V(r)f(\vec{r}) = E_{\rm rel}f(\vec{r})$ $\downarrow f(\vec{r}) = f(r,\theta,\phi) = \frac{R(r)}{r}Y_{\ell m}(\theta,\phi)$ $-\frac{\hbar^2}{2\mu}\frac{d^2R_{n\ell}(r)}{dr^2} + \left[V(r) + \frac{\hbar^2}{2\mu}\frac{\ell(\ell+1)}{r^2}\right]R_{n\ell}(r) = E_{\rm rel}R_{n\ell}(r)$ 遠心力ポテンシャル

微小振幅近似

$$\begin{split} W(r) &\equiv V(r) + \frac{\hbar^2}{2\mu} \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} \\ &\cong W_{\ell}(r_{\ell}) + \frac{dW_{\ell}(r_{\ell})}{dr} \Big|_{r=r_{\ell}} (r-r_{\ell}) + \frac{1}{2} \frac{d^2W_{\ell}(r_{\ell})}{dr^2} \Big|_{r=r_{\ell}} (r-r_{\ell})^2 + \cdots \\ &\cong W_{\ell}(r_{\ell}) + \frac{1}{2} \mu(\omega_{\ell})^2 x^2 \quad x \equiv r - r_{\ell} \end{split}$$

$$-rac{\hbar^2}{2\mu}rac{d^2R_{n\ell}}{dx^2}+iggl[V(r_\ell)+rac{\hbar^2\ell(\ell+1)}{2\Theta_\ell}+rac{1}{2}\mu\omega_\ell^2x^2iggr]R_{n\ell}\cong E_{
m rel}R_{n\ell}$$
 $\Theta_\ell\equiv\mu r_\ell^2$:慣性モーメント

4. 同種粒子は互いに区別できない (同種粒子の不可識別性)

原子以下の階層では、同じ種類の[量子的]粒子のそれぞれを区別できない。

「同じ種類の[量子的]粒子」とは、質量、電荷、スピンなどが同じ、物理的な条件が同じであれば、全く同様に振舞う[量子的]粒子のことをいう。

$$m_{\rm e} = 0.91093897 \times 10^{-30} \text{kg}$$

 $e = 1.6021773 \times 10^{-19} \text{coul}$
 $\mu = -1.00115962 \ \mu_{\rm B}$ $\mu_{\rm B} \equiv \frac{e\hbar}{2m_{\rm e}c}$

運動の軌跡から区別することもできない。

ある時刻で2つの[量子的]粒子が空間的に異なる場所にいたとしても、時間の経過ととも 波動関数が広がってゆき、2つの粒子の存在確率密度は重なっていく!

力学的な性質からも区別することもできない。

運動量が交換するなどの相互作用がある。

個々の電子や個々のクォークはなぜ互いに瓜二つなのか?

- 粒子はそれ自体独立した存在ではなく、ある量子場の特殊な表れ (「よじれ」)
- 全体的に見れば、量子場はいずこも皆同じ
- 固体のように見える物質も、ぜんぜん場所をとることのない量子場の表れにすぎない。
- 物質粒子とは単に量子場がたまたま集中しているところ、 風呂場の蒸気が凝縮して水滴になるように、物質粒子は場から凝縮 してくるのだ。

5. スピン自由度をもつ同種の多粒子系の波動関数の (位置、スピン)交換に対する対称性

$$\psi = \psi(\vec{r}_{1}, s_{1}, \vec{r}_{2}, s_{2})$$

$$\hat{P}_{12}\psi(\vec{r}_{1}, s_{1}, \vec{r}_{2}, s_{2}) \equiv \psi(\vec{r}_{2}, s_{2}, \vec{r}_{1}, s_{1})$$

$$= \lambda \psi(\vec{r}_{1}, s_{1}, \vec{r}_{2}, s_{2})$$

$$(\hat{P}_{12})^{2}\psi(\vec{r}_{1}, s_{1}, \vec{r}_{2}, s_{2}) = \lambda^{2}\psi(\vec{r}_{1}, s_{1}, \vec{r}_{2}, s_{2})$$

$$\longrightarrow \lambda = \pm 1$$

$$\hat{P}_{12}\psi(\vec{r}_1,s_1,\vec{r}_2,s_2) = \psi(\vec{r}_1,s_1,\vec{r}_2,s_2)$$
: 対称
 $\hat{P}_{12}\psi(\vec{r}_1,s_1,\vec{r}_2,s_2) = -\psi(\vec{r}_1,s_1,\vec{r}_2,s_2)$: 反対称

(プランク定数h-barの単位で) 半整数スピンを持つ粒子

交換操作に反対称的

フェルミ粒子:電子、陽子、中性

子 fermion 物質を構成する粒子

交換操作に対称的く

(プランク定数h-barの単位で) **↑ 整数スピンをもつ粒子**

ボース粒子:光子、フォノン、中間

子boson フェルミ粒子間の相互作用を媒介する粒子

相対論的量子力学 (場の量子論)によ り導出

6. フェルミ粒子に対するパウリの排他原理

1925 W. Pauli

ひとつの量子状態を占有できるのは電子は1つだけである。

電子の量子状態
$$(n,\ell,m_\ell,m_s)$$
 n 主量子数 ℓ 軌道角運動量z成分 その波動関数 ψ_{n,ℓ,m_ℓ,m_s} m_ℓ 方位量子数(軌道角運動量) m_s スピンz成分

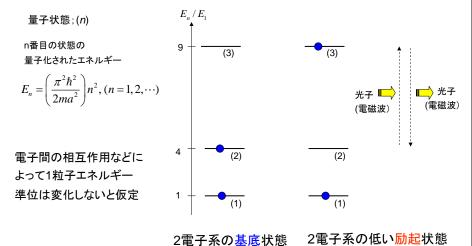
$$\psi(a,b) = -\psi(b,a) \quad a = \left\{ n_a, \ell_a, m_{\ell a}, m_{sa} \right\}, b = \left\{ n_b, \ell_b, m_{\ell b}, m_{sb} \right\}$$

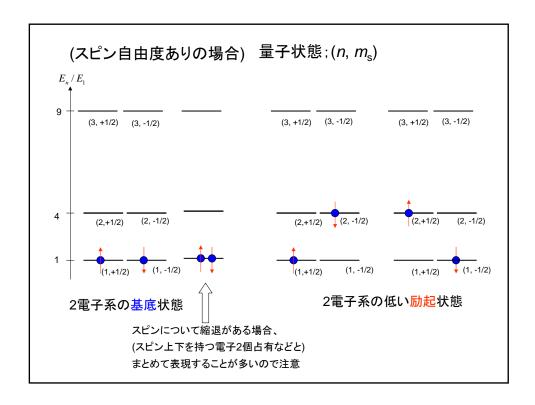
仮に、2つの電子が同じ状態を占有しようとすれば

$$\psi(a,a) = -\psi(a,a) \rightarrow \psi(a,a) = 0$$

6.1 電子の量子状態の占有の仕方

例:幅aの無限量子井戸における2電子系 (スピン自由度なしの場合)





6.2 スレーター行列式

フェルミ粒子系に対する反対称規格化状態

$$\int \varphi_a^*(\vec{r}_k, s_k) \varphi_b(\vec{r}_k, s_k) d\vec{r}_k = \delta_{ab} \quad (k = 1, 2)$$

$$\psi_{\underline{a_1},\underline{a_2}}(\vec{r_1}, s_1, \vec{r_2}, s_2) = \frac{1}{\sqrt{2}} \left[\varphi_{\underline{a_1}}(\vec{r_1}, s_1) \varphi_{\underline{a_2}}(\vec{r_2}, s_2) - \varphi_{\underline{a_2}}(\vec{r_1}, s_1) \varphi_{\underline{a_1}}(\vec{r_2}, s_2) \right]$$

$$= \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{vmatrix} \varphi_{\underline{a_1}}(\vec{r_1}, s_1) & \varphi_{\underline{a_1}}(\vec{r_2}, s_2) \\ \varphi_{\underline{a_2}}(\vec{r_1}, s_1) & \varphi_{\underline{a_2}}(\vec{r_2}, s_2) \end{vmatrix}$$

$$\psi_{\underline{a_1},\underline{a_2}}(\vec{r_1},s_1,\vec{r_2},s_2) = -\psi_{\underline{a_1},\underline{a_2}}(\vec{r_2},s_2,\vec{r_1},s_1)$$

$$\iint \psi_{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2}^*(\vec{r}_1, s_1, \vec{r}_2, s_2) \psi_{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2}(\vec{r}_1, s_1, \vec{r}_2, s_2) d\vec{r}_1 d\vec{r}_2 = 1$$

どのような場合に、反対称化が重要になるか?

地球上にある1個の水素原子と月の上のもう1個の水素原子を考えたとき、 2つの水素原子の2つの電子間に反対称化を考慮する必要があるか?

十分遠方にある電子間の反対称化は考慮する必要はない!

説明: 相関のない2電子系の波動関数 $\Phi(\vec{r}_1, \vec{r}_2) \equiv \varphi_a(\vec{r}_1)\varphi_b(\vec{r}_2)$

反対称化された2電子系の波動関数

$$\begin{split} \Psi \left(\vec{r}_{1}, \vec{r}_{2} \right) & \equiv \frac{1}{N} \left[\varphi_{a} \left(\vec{r}_{1} \right) \varphi_{b} \left(\vec{r}_{2} \right) - \varphi_{b} \left(\vec{r}_{1} \right) \varphi_{a} \left(\vec{r}_{2} \right) \right] \\ 1 & = \iint \Psi^{*} (\vec{r}_{1}, \vec{r}_{2}) \Psi (\vec{r}_{1}, \vec{r}_{2}) d\vec{r}_{1} d\vec{r}_{2} \\ & \to N^{2} = 2 \left(1 + \left| \int \varphi_{a}^{*} (\vec{r}_{1}) \varphi_{b} (\vec{r}_{1}) d\vec{r}_{1} \right|^{2} \right) \equiv 2 \left(1 + \left| S_{ab} \right|^{2} \right), \\ S_{ab} & \equiv \int \varphi_{a}^{*} (\vec{r}_{1}) \varphi_{b} (\vec{r}_{1}) d\vec{r}_{1} \end{split}$$

ラベルaの電子がある空間領域V。に存在する確率

相関のない波動関数の場合

$$P(V_a) \equiv \iint_{V_a} \Phi^*(\vec{r}_1, \vec{r}_2) \Phi(\vec{r}_1, \vec{r}_2) d\vec{r}_1 d\vec{r}_2 = \int_{V_a} \left| \varphi_a(\vec{r}_1) \right|^2 d\vec{r}_1$$

ラベルbの電子の座標についての積分は全領域について実行

反対称化された波動関数の場合

$$\begin{split} P_{antisym}(V_a) &\equiv \int_{V_a} \Psi^*(\vec{r}_1, \vec{r}_2) \Psi(\vec{r}_1, \vec{r}_2) d\vec{r}_1 d\vec{r}_2 \\ &= \frac{2}{N^2} \int_{V_a} \left| \varphi_a(\vec{r}_1) \right|^2 d\vec{r}_1 - \frac{2}{N^2} \int_{V_a} \varphi_a^*(\vec{r}_1) \varphi_b(\vec{r}_1) d\vec{r} \int_{V_a} \varphi_b^*(\vec{r}_2) \varphi_a(\vec{r}_2) d\vec{r}_2 \end{split}$$

ラベルaは、そのラベルをもつ両方の波動関数に現れているために、 干渉項は領域V_aにわたる両方の積分をもつ。 領域V_aに存在する確率が、相関のない場合と反対称化された場合で相違が顕著になるのは,重なり積分が変数の領域V_aにおいて重要であるときのみである。 □

(基底状態の)は波動関数は束縛状態に対しては指数関数的に減少するので、この重なり積分が重要になるのは、原子がお互いに非常に接近している場合のみである。

$$\varphi_a(x) = e^{-\beta x^2}, \varphi_b(x) = e^{-\beta(x-L)^2}$$

$$\longrightarrow \int_{V_a} \exp[-\beta x^2 - \beta(x-L)^2] dx \propto \exp(-\beta L^2/2)$$

$$\longrightarrow 0 \quad (as L \to \infty)$$

パウリ原理は原子や分子において考慮されるべきものであるが、原子が十分に離れている場合に状況では考慮する必要はない。

原子間隔が数オングストロームである結晶格子においてさえ、 重なり積分はしばしば小さくて、反対称化は不要である。

水素原子の平均半径としてのボーア半径 $a_{\scriptscriptstyle B} pprox 0.53 {
m A}$

Nフェルミ粒子系

$$\hat{P}_{k\ell}\psi(\xi_1,\dots,\xi_k,\dots,\xi_\ell,\dots,\xi_N)$$

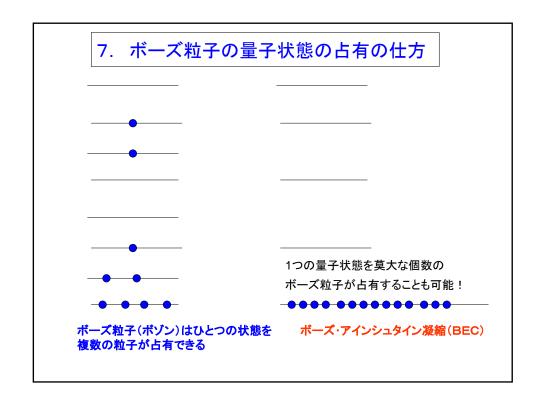
$$\equiv \psi(\xi_1,\dots,\xi_\ell,\dots,\xi_k,\dots,\xi_N)$$

$$= -\psi(\xi_1,\dots,\xi_k,\dots,\xi_\ell,\dots,\xi_N)$$

$$(\vec{r}_k,s_k) \equiv \xi_k$$

$$\int \varphi_a^*(\vec{r}_k,s_k)\varphi_b(\vec{r}_k,s_k)d\vec{r}_k = \delta_{ab} \quad (k=1,2,\dots,n)$$

$$\psi_{a_1\dots a_N}(\xi_1,\dots,\xi_N) = \frac{1}{\sqrt{N!}} \begin{vmatrix} \varphi_{a_1}(\xi_1) & \varphi_{a_1}(\xi_2) & \dots & \varphi_{a_1}(\xi_N) \\ \varphi_{a_2}(\xi_1) & \varphi_{a_2}(\xi_2) & \dots & \varphi_{a_2}(\xi_N) \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ \varphi_{a_N}(\xi_1) & \varphi_{a_N}(\xi_2) & \dots & \varphi_{a_N}(\xi_N) \end{vmatrix}$$



8. 複合粒子の量子統計性

ファルミ粒子の奇数個から構成される複合粒子:フェルミ粒子

ファルミ粒子の偶数個から構成される複合粒子:ボーズ粒子

9. 無限個の粒子から構成される多粒子系金属中の電子集団とバンド理論

固体が金属か絶縁体であるかは、固体内の電子の運動状態により決まる。

(1) 固体内で電子が感ずるポテンシャルが一定値V_oの場合: 自由電子ガス模型(フェルミガス模型)

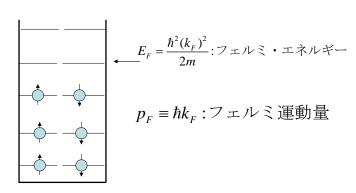
自由電子に対して長さLの周期的境界条件を設定すると、 電子の固有関数は平面波となる。(簡単のため、1次元の場合を考える)

$$\phi_k(x) = \frac{\exp(ikx)}{\sqrt{L}}, (k = \frac{2\pi}{L}n, n = 0, 1, 2, \dots)$$

固有エネルギー

$$E_k = \frac{\hbar^2 k^2}{2m} + V_0 = \frac{4\pi^2 \hbar^2}{2mL^2} n^2 + V_0 \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

固有エネルギーは一般には離散的であるが、 長さLが十分に大きければ、連続的な値をとる。



(2) 固体内で電子が感ずるポテンシャルが原子近傍に限定される場合: 電子状態のバンド理論

1次元(長さL)で、同じ原子が等間隔a(=格子定数)で並び、 周期的ポテンシャルが作用すると仮定。 V(x+a)=V(x)

$$\phi_k(L) = \phi_k(0); (L = Na)$$
 $\phi_k(x+a) = c\phi_k(x); (|c| = 1)$
 $\rightarrow \phi_k(x+a) = e^{ikx}\phi_k(x)$: Blochの定理
 $\phi_k(x)$: Bloch関数

N個の原子からなる系で、原子間の重なりが無視できると、 n番目の原子の電子の波動関数 $\phi^n(x)[\phi^n(x+a)=\phi^{n-1}(x)]$

$$\phi_k(x) = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{n=1}^{N} e^{ikna} \phi^n(x)$$